

海外だより



英国コンピュータ学会見聞

伊藤 宏†

はじめに

暮に積った雪がまだ消えやらぬ新年早々の1月4日と5日に、英国コンピュータ学会(BCS=The British Computer Society)の1979年全国大会BCS 79が開催されました。会場は大英博物館近くのロンドン大学教育研究所でしたが、これと並行して開かれた展示会は、そこから歩いて5分のブルームズベリー・センターホテルで行われました。

本学会会員諸氏の中には、米国内の学会や国際会議に参加した経験をお持ちの方は多いと思います。しかし英国の国内大会となると、今回は日本人の姿は見かけなかったように思いますし、過去にも日本からの参加者が多いとは考えられません。筆者は昨年8月からロンドンに滞在している関係上、今回BCS 79に参加する機会を得ましたので、そこでの見聞を中心にBCSの現況など紹介させて頂きたいと思います。

BCS 79

日本の学会の全国大会は、多数の発表者が短いペーパーを次々に発表する形式が一般化しているようです。BCS 79はこれとは様子が異なり、動向・展望を中心として一種の講習会のような感がありました。これは平常の学会活動の進め方にも関係してくるところが大きいと考えられます。

大会初日の午前中は、開会セッションにあてられました。基調講演は現内閣関係の一人(王爾尚書)であり、ACARD(The Advisory Council on Applied Research and Development)の委員長の職にあるピアート卿が20分間にわたり講演しました。英国におけるマイクロエレクトロニクス振興は英国政府の重要施策の一つですが、これが雇用にどのような影響を及ぼすかという問題がテーマでした。「職種転換が生ずることは避け難いので、それに対応できる柔軟性を高めてお

く必要がある。政府はマイクロエレクトロニクス応用を推進し、新しい仕事を生み出す努力をする。政府の役割は重要であるが、経営者、労働組合も新技術の導入に際し重い責任を負っており、事態を十分に認識してほしい。」という骨子でした。

英国の代表的新聞ザ・タイムズが昨年12月1日から長期ストに入った原因は、電算写植の導入に伴う印刷部門の職転、解雇に起因しています。この例などはまさに英国において新技術への適応の難しさを示すものであり、英国の大きな悩みの一つとなっています。

基調講演のあとはサマナー BCS 会長が、15分間挨拶に立ちました。教育問題については、「コンピュータ学科の学生数が、英国で次第に増加している。その質も、数学、物理などの伝統的学科にくらべてそん色のないものとなりつつあることは喜ばしい。」とのべ、学会活動の面では、「一般ユーザ層の会員が、スペシャルグループ活動に、もっと積極的に参加する体制づくりが必要である。」ことを強調しました。

1月4日午後、及び1月5日は全日、一般講演にあてられました。BCS 79はスペシャルグループの成果発表という形を基本に構成され、合計18のスペシャルグループが各半日、6セッション並行という形式で成果・展望を報告しました。

今大会の参加費は会員£25(約1万円)、非会員£50(約2万円)と日本の水準よりは高めであるため、どんな立派な予稿集が渡されるかと内心期待していました。しかし実際に渡されたのは1論文1~2ページ、電子複写刷り合計50頁たらずの仮綴じのものであったのは、やや意外な感を持ちました。

データ通信

一般セッションの例として、5日の午前が開かれたデータ通信スペシャルグループの場合を取り上げて見ましょう。午前中3時間のこのセッションに論文は2編だけで、それぞれ発表が約1時間、討論20分というゆ

† Hiroshi ITO (NTT London Representative Office)
日本電信電話公社ロンドン海外駐在事務所

ったりした組み方でした。

最初の発表は英国郵電公社のギブソンによる、英国のデータ通信の現状と展望に関するレクチャでした。現在のデータ伝送サービスである Date 1 サービスの拡充、次いで 1979 年 12 月にサービス開始が予定されているパケット交換網の計画が示されました。デジタル回線交換網は、わが国の場合と異なり、パケット網よりも大幅に時期が遅れ、1985 年頃からスタートする計画とされています。

欧州各国間を結ぶユーロネット網は、若干線表が遅れ気味ではありますが今年内のサービス開始が見込まれています。初期における重要性に比し、長期的にはトラフィック増加とともに各国間を直結するネットワークが次第に形成されて行くので、ユーロネットの重要度は次第に低下することになるであろうとの見方でした。

英国の電話網においては、新しい電子交換機システム X の開発が目下最大の急務となっています。ネットワークの将来形としては、このシステム X とデジタル伝送の発展とが結び付いて、当面は別々に開発されるデータ通信、電話の両ネットワークが、1980 年代後半以降次第に統合されて行くことになるであろう、というまとめでした。

ビューデータ

データ通信のセッションの第 2 の発表は、英国郵電公社研究所でビューデータを着想、開発し、現在はコンサルタントの立場にあるフェディダが行いました。

ビューデータについてはすでにご承知の方が多いと思いますが、TV 受像機にアダプタを付し、電話回線によって送られて来る信号を画面に表示するものです。TV 電波に静止画信号をのせて送るテレテキストは英国では既に 2 年前から本サービスに入り、1 万台くらいのアダプタが使われていると言われます。この両サービスの本質的な違いは、ビューデータでは電話回線を使っているため端末からセンターへ向け制御信号が送出できるという点にあり、ここから端末で選択できる情報量、アクセス時間等に差が生じます。両サービスは端末での表示形式は変わりませんが、上述の差から適用分野は同じではなく、両者は補完的な関係に立って発展して行くであろう、という見解でした。

英国郵電公社では、同公社のビューデータ・サービスの名称にはプレステルという言葉を用いています。これは「ビューデータ」は普通名詞の結合に過ぎず商標としては不適切という理由で登録できなかったため

です。プレステルは 1978 年 9 月以来、試行サービス実施中の段階にあり、BCS 79 の会場にも数台のセットが持ち込まれデモンストレーションを兼ねて発表が進められました。プレステルの本サービス開始は、今年内と発表されています。

展 示 会

展示会は 1 月 4 日から 6 日土曜日まで、3 日間開催されました。こちらは Fun Fair (遊園地) と銘打って、若い層のコンピュータへの関心を高めるという点に狙いが置かれました。おのずから出展品目もマイクロコンピュータが中心となり、写真のとおり各種のデモンストレーションが、小学生を含む若い人達で賑わっていました。

BCS 79 の参加者数は、会議に 530 名、展示に 5,000 名という結果で、会議は予想よりやや少なく若干期待に反したが展示は大成功であったと主催者側は談話を発表しています。

BCS の場合、本学会のように毎年定期的に全国大会が開かれる訳ではなく、また大会の形式も毎回必ずしも同じではありません。前回の大会は 1977 年 10 月に Datafair 77 という名称で開かれましたが、BCS の年次報告書には、参加者数が少なく期待外れであったと記されています。そこで今回はスペシャルグループが各セッションを企画構成する新方式が採用されたようです。次回をどうするかは、今回の大会がおおむね予期した成果をあげたので多分同じ形式となるのが、時期は未定であり少くとも 1980 年 1 月ではない、というのが BCS 事務局の現在の見解です。展示会は会議とは独立に開くべきだとする議論もあり、今回の BCS

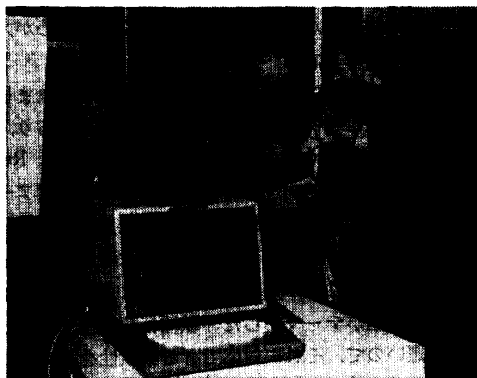


図-1 BCS 79 展示会のひとコマ (写真は BCS の好意による)

Distinguished Fellow	10
Honorary Fellow	33
Honorary Member	4
Fellow	1,442
Member	11,681
Licentiate	439
Associate	1,535
Affiliate	3,800
Student	3,879
Institutional*Affiliate	307
Retired	109
	<u>23,239</u>

図-2 BCS 会員数 (1978. 4. 30 現在)
出所 BCS Annual Reports 1977/78

79 の成果をどう次回へ結び付けて行くか、目下模索中の段階と想像されます。

BCS の活動

BCS の会員数は、1978 年 4 月末現在 23,239 名を数えています。図-2 は種別々の会員数ですが、会員資格に対する考え方は、日本とはいささか異なるようです。大きな違いの一つは、会員のランクが多種あり、年齢、業績等に応じて上位ランクへと移って行くことです。第2は、図-2 で Licentiate 以上のいわば正会員相当の資格、及びこれらへの過渡的資格である Associate と Student の資格を得ようとする資格審査がきびしく、指定学校の指定学科を卒業している場合を除き、原則として試験を受けてそれにパスしないと会員になれません。Affiliate は誰にでも開放されていますし、学会活動への参加、投票権等に関して Licentiate 以上と差はありません。しかし例えば Member の場合、MBCS という称号を使うことが許されますが、Affiliate はそれが認められないと会則に記されています。会員資格を試験で審査するという考え方は BCS に限らず、英国電気学会 (IEE) やその他の学会でも一般的のように見受けられます。

次に会員数を見ますと、約 23,000 名と本学会の 2 倍あります。日英の汎用コンピュータ設置台数は、現在約 5 対 1 の開きがあり、これが両国のコンピュータ人口の比をそのまま示すものではないとしても、この結果が生ずるには何か理由がありそうです。はっきりした理由は良く分かりませんが、会員資格に対する考え方の違いなども考え合わせてみると、英国の学会にはかつての同業者組合の伝統が影を落しているのではないか、などと勝手に想像しています。

会誌は The Computer Journal, Computer Bulletin の 2 種 (いずれも季刊) があります。前者は論文誌、後者はいわゆる会誌相当のもので、たとえば年次報告書なども全文これに掲載されます。その他にも一つ、Computing という A3 判約 80 頁位の週刊紙があります。これは会員になればもちろんですが、会員にならなくてもコンピュータ関係者であるという登録をすると無料で送られて来ます。全体ページ数の 2/3 近くが広告 (大部分が求人広告) で、経費はそれではまかなわれているようです。発行は BCS とは独立の会社によって行われていますが、編集は BCS がタッチしており、BCS のページというスペースも毎号確保されています。ここには学会の各スペシャルグループ、支部等の講演会、講習会の予告や、BCS 理事会の審議模様などが取上げられています。週刊であるため速報性があり、これが会誌が季刊であることによる不便さを補っているようです。

むすび

BCS の全国大会はすでにのべた通り毎年必ずしも開かれませんが、会員数の規模に比し大会への参加者数はやや低調という感が否めません。しかし 39 を数えるスペシャルグループや、各地域支部の活動は非常に活発で、講演会、講習会は頻繁に開かれています。支部は地方だけでなくロンドンにもあります。これらを考え合わせて見ると、日本とくらべて活動がどうかは、一概に言えないように思われます。

学会の果す役割に、日本とは違った意義が期待されているのではないかと、筆者にはどうもそう感じられます。クリスマス時期でなくても夕食会やダンスパーティなどの社交的催しが学会主催で開かれます。これなどは習慣の違いと言ふべきかもしれませんが、しかし例えば夕方の講演会の場合、6 時 30 分開始が多いのですが、6 時から英国式ティーとビスケットが無料サービスされ、参加者は時間まで情報交換などで賑やかに過しています。わが国でもこうした慣習、雰囲気はごく普通のものとならないものか、こうしたある講演会に出席したとき、こんな思いがしばらく念頭を去りませんでした。

(昭和 54 年 3 月 28 日 受付)